和歌を作ろう　～あつまれ！ことばの森！！石川塾へ！！！～

日本の歌、「和歌」(短歌)という定型詩は、＜心に浮かんだある風景＞を5(ご)・7(しち)・5(ご)・7(しち)・7(しち)ずつに区切り、合わせて31音の文字にすれば、いいんだよ。「歌う」題材は、なんでもいいよ。
たとえば、夏休み/コロナ/マスク/温泉プール/磯遊び/カニ/バーベキュー/焼肉/洗濯もの/スイカ/誕生日/グラタン/ヘアーカット/お母さん/セミ取り/お父さん/昨年のハワイ/回転ずし…を思い浮かべ…あとは、その時どう思ったのかどう感じたのか「ことばの森」へ探しにでかけると…その時の気持ちを表す「ことばのふしぎ・おどろき」に出会えるかもしれません。石川塾長が一人一人に**和歌のつくり方**を教えてくれるよ。

日時　**8/3(月)～8/7(金)**　**8/17(月)～8/21(金)**の**通常授業内**で受講できます！！

(サービス受講料)コマ数を増やしてじっくり和歌づくりを楽しむのもよし♡
(小学生4年以上)1時間500円プラス15分サービス
(小学生3年以下お母さんと一緒で)1時間500円プラス15分サービス

塾生以外の友達兄弟姉妹の方もどうぞ。参加希望の方は、塾長まで。

持ち物　「イッキ読み」の10ミリ方眼ノートを使用します。新しく用意する必要はありません。

出来た作品は、季刊誌『千の声 VOICE』に掲載・発表します。

歴史的かなづかひ①　『私の國語教室』/福田恆存（ふくだ・つねあり）/文春文庫

「金色(こんじき)の　ちひさき鳥の　かたちして　いてふちるなり　夕日の岡(おか)に」　与謝野晶子(よさの・あきこ)
石川塾の朗読暗唱で誰もが始めに習う与謝野晶子の和歌です。「ちひさき」と書いて「ちいさき」と、「いてふ」と書いて「いちょう」と読みます。「てふてふ」なら「ちょうちょう」と読みます。どうしてでせうか。なぜそう読めるのでせうか。これから日本語の＜歴史的かなづかひ＞を皆さんと一緒に辿り遡っていきます。

現代かなづかいは、その根本方針ないし原則は、表音主義である。一音一字、一字一音を原則としている。(第一章「現代かなづかい」の不合理)一音一字、一字一音の表音主義という原則がそのまま適用できぬ例外のあることを、知らなければならない。第一の例外は、助詞の「は」「へ」「を」であります。表音主義を原則とするなら、「私は」「東京へ」「水を」と書くのはをかしい。「私わ」「東京え」「水お」と書かねばならぬはずだ。さもないと、「は」「へ」は文字どほりに「ハ」「へ」と発音する場合と、「ワ」「エ」と発音する場合と二通りになってしまう。それでは、一文字二音です。また、「オ」の音に「を」を用いなければならぬとすると、一音二字になってしまひます。この助詞「は」「へ」には附則がついてゐます。「は」「へ」はたださう書くことを「本則」とするといふだけのことで、「わ」「え」と書いても「誤りとはしない」といふのです。それで安心してゐるわけにはゆかない。なぜなら、助詞「を」だけは「お」と書いてはならず、「を」と書かねばならない。これはどういふわけか。その理由が解りますか。それも文句はあとまはしにしませう。(第一章「現代かなづかい」の不合理 P18・19)**(続く)**

読解力をつける①　『AIに負けない子どもを育てる』/新井紀子/東洋経済

「うちの子は文章題が苦手で」「読解力がなくて」と嘆くお母さん方が多い。算数・数学は概ね「計算」「図形「文章題」の3つから成り立っている。どうして文章題が苦手なのだろう。なぜ解らないのだろう。一つは問題にある語彙文章文脈の意味内容が分からないから。「1(いち・ひとつ)」にはたくさんの使い方・意味そして定義がある。小学3年生から習う割り算の「商」「余り」にも意味がある。他に「は・が」「の」「を・に」など助詞の使い方で意味が変わる。

江戸が当時世界最大級の商業都市で、「読み書きそろばん」が就職や出世に有利だったことや寺子屋の普及などにより、日本は200年前から際立って識字率が高い国です。

すっと、まさに自然に読める人と、「漢字多めで嫌だな」という印象を持つ人に分かれるでしょう。見た瞬間に「無理!!」と諦める層が(リーディングスキルテスト(RST)の結果から考えると)25％くらいいても、おかしくありません。改めて読んでみましょう。

江戸、当時、最大級、都市、出世、有利、寺子屋、普及、際立つ、識字率

といった語が並んでいます。これらを知らないと、この文を「読んでわかる」ことは難しい。「辞書で調べればいいじゃないか」と思うかもしれません。では、試しに『広辞苑』で寺子屋を引いてみましょう。(略)おおっと！「学制公布」とか「庶民」とか「世俗的」など、「寺子屋」よりも難しい言葉が出てきました。文中の5割の言葉を知らない、という状態の人にとって、辞書はほとんど助けにはなりません。私たちはどこで語彙を獲得しているかといいうと、基本的には身近な環境から、です。生まれ落ちたときから、親や身近な年長者(保育園の年長の子や親族、近所の人たち)の会話、加えてテレビなどから音として言葉が入ってくるのです。(第2章「読める」とはなんだろう　正しく「読む」ために必要なこと　P32～34)**(続く)**